

# うつけ通信 vol.11

今回は、「三つの村」構想のうちの一つである「野生化する種まきの村」についてのお話をお届けします。

「野生化する種まきの村」の『野生化する』とはなんぞや、ということがわかりませんと話が進みませんね。「野生化する」の野生とは天然自然で育った生物がもっている性質のことを表しています。たとえばハマチには天然と養殖がありますね。天然のハマチの性質が野生というわけです。自然界で育ったものと、養殖場で人間の手にかかって育ったものとは、その性質や能力などすべてにおいて違いがあります。能力に差があるというより次元が違うんですね。

自然界に生きる生物たちは、それぞれが持っている能力によって己の身が守られています。環境の変化を予知する予知能力、環境の変化に適応する適応力、天敵の存在を察知する能力、獲物の居場所を察知する能力、鋭敏な五感、瞬時の判断力・決断力・行動力。自然界で生きる生物たちに、迷っている暇はありません。判断の遅れは即自分の命取りになりますからね。これらの能力を総

称して「生命力」というわけです。僕はこの生命力のことを、生きるための『脳ミノ』と言っています。

ところが養殖で育てられたハマチは、定刻になつたら餌を与えられ、のほほんと生きていけるわけですから、野生の能力はありません。魚だけではなくて、米も野菜もおんなじです。何々の肥料、何々の微生物というように、次から次へと与えられているものには脳ミノはできないわけです。

例えば脳ミノのある米は、台風のを予測したりします。台風が上陸する年はそれを予測して、一向に伸びようとしない。このことによつて倒伏を避けるわけです。そして台風が過ぎると一気に伸びるということをします。ただしどんな稲でも刈り取り時期の迫った頃の台風までは避けられないので、その場合は、他の田んぼと同じように倒伏することもあります。倒伏した場合どうなるか。倒伏というのは稲穂の穂の部分が地面に着きます。そして脳ミノのない米は芽が出てくるんですね。でも、脳ミノのある米は発芽しないんです。春にならないと発芽しない。脳ミノのある米は秋に発芽するとこれから冬が来るので生きていけないということを知っているわけです。ちなみに発芽玄米というのが巷で流行ってますけど、あれは脳ミノがないってことを証明しているようなものです。さらに発芽させていますから余計に生命力は空っぽです。

なぜ、脳ミノのあるものを生産しなければならぬかというのと、私たちは食べたものの「コピ」だからです。脳ミノのあるものを食べればその人は脳ミノのある人間になります。でも脳ミノのないものばかりを食べていたら脳ミノのない、生命力のない、生きる力のない人間になるということなんです。

私たちは生きるために食べますね。食べるということの本質は栄養を摂るということではなくて、生命力の連鎖ということなんです。養殖の魚はホルマリンや抗生物質で薬漬けにされているから、それを食べると健康に悪いなんていいますが、それ以上に脳ミノがないということのほうが深刻な問題であるわけです。

生命力のない脳ミノのない食べ物ばかりを採り続けた結果、無意欲と言われる子供がいつぱい出てきました。何に対しても意欲が湧かない。たまにいいな〜とおもつことがあつても決断ができません。決断しても、口では、やります、できます、わかりました、よく理解できました！」と言ってるんだけども足は一つも動かない。行動が出来ない若者がいつぱいいます。



米や野菜を生産するときや植林をするとき、その作物は田畑または山林というところで人間の手にかかるわけです。これはある意味養殖といえます。その作物に天然自然の環境で育ったものと同じ性質や能力を発揮させること、生きるための脳ミソを発現させることを「野生化する」というわけです。「野生化する種まきの村」はそのような作物を生産する村であるというわけです。「種まきの村」の種まきというのは、育苗のことを表しています。種から発芽発根するとき、その作物の一生が決まる。ちゃんとした脳ミソをもてるかどうかは、発芽発根するときの環境で決まります。三つ子の魂百までということですから。この育苗を重視して食糧、衣料、材木などの生産をしてゆく必要があります。私たちの衣食住は他の生命を活用させてもらっているわけですが、その生命の種をまく村ということですから。そしてこの村のやり方はいつしか世界中の雛形になってゆくというわけです。

これで「野生化する種まきの村」という言葉の意味がわかったわけですが、それで、作物を野生化する方法、どうしたら野生化するのかという疑問がでてきますね。

その答えは、『主語を変える』ということなんです。例えば大根というものをとりあげて考えてみますと、皆、人間が大根を育てているように勘違いしています。でも本当は、大根は大根の内なる力で成長し、生きているわけです。大根は自分

自身で生きていける能力を持っているわけです。だから「人間が」ではなく、「大根が」というように主語を転換する。そうすると大根は野生化するんです。大根は自分より偉いんだという、尊重の念を持つことです。大根を見下さない、馬鹿にしない。ほうれん草と自分は同等だ、ほうれん草さんのほうが私より偉いんだと心の底から思うことです。これが根本の答えです。野生化の出発はここから始まるんです。

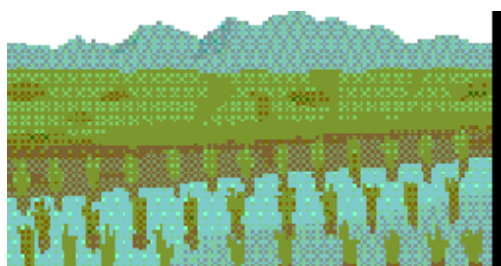
大根が、ほうれん草が、自分自身で生きぬく力を持つているということ信じられたら、人間は余計な手を出さないようになれます。野生化するためには手を出さないことが大切なんです。余計な手を出せば出すほど、どんどん生きる力が奪われていくわけです。

今の農家は、ほうれん草が100本ほどあったとしても、そのうちの一本だけ葉っぱが黄色くなったら「こりゃえらいこっちゃ」とすぐにクサリを撒きますね。大根であるうが、キャベツであるうが、梅畑もミカン畑も、みんなそんなことしてます。日照が続いてちよつと色が悪くなつてくると、もうホースを引っ張り出して水を撒いています。これも余計な手出しです。ホースで撒かなくても、雨の降る日は必ずやってきます。それまで手を出さずに待つことが必要なんです。どうぞあなた自身で生きなさい乗り越えなさいというようにすれば、作物は次の雨までどうやって持ちこたえたらいいか、想像や推測を働かせます。生きていく力、脳ミソが備わるわけ

です。でも、一回水を撒いてしまつと、作物はそれに頼りますから、次からも撒き続けなければなりません。

どうぞあなた自身で生きなさいというのは薄情なことではありません。愛情があるからこそできることです。本当に尊重していないとできないことです。これは子育ても一緒です。

(つづく)



#### 編集後記

内なる力(イネイト)を信じきる。私たちはその邪魔をしない、余計な手を出さない。木村先生と宮本先生は別々の道を歩んでこられました。到達された答えは面白いほどにいつも同じなので、なんだか笑ってしまうときがあります。